

スタンフォード大学海外研修報告

徳島大学医学部診療放射線技術学講座
久保 均

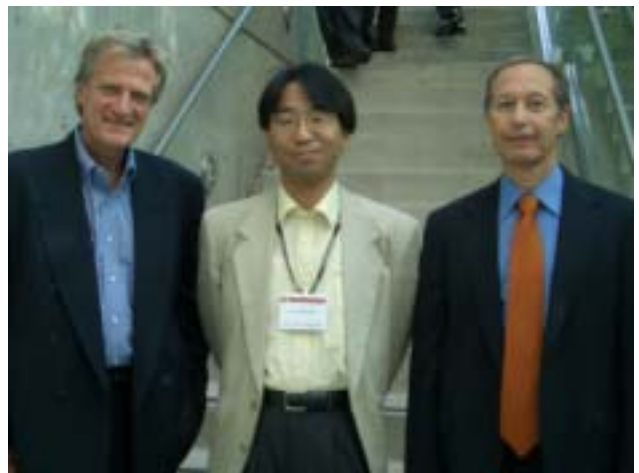
私は様々な画像診断技術を用いた生体機能や疾病の定量的画像評価を研究テーマとし、主に MR 技術を用いた評価方法の開発に取り組んでいる。特に高磁場装置による fMRI, MRS, diffusion 等の技術を用いた定量評価の研究を行うとともに、近年非常に話題になっている分子イメージングにも着手を始めている。今回の海外研修は、私の研究領域では先進的な活動を行っているスタンフォード大学で行われるものであり、その内容にかなりの期待を持って参加した。

本研修は午前中に各種の講義、午後はワークショップという構成で進められた。非常によく考えられた内容構成であり、全ての内容に集中して参加することが可能であった。特に私は MR を専門としているために今回の内容は非常にタイムリーであり、まさに最適な研修となった。もちろん専門領域以外の講義も大変わかりやすく、あまりフォローしていない領域においても最新の知見を得ることができた。またワークショップの内容也多岐にわたり、中には私自身がすでに行っている内容のものもあったが、全般的にはスタンフォードでの研究の体制や方法などを具体的に体験することができ非常に参考になるものであった。全般的には私の専門領域である MR に関する内容が多かった印象があるが、様々なモダリティを横断的に網羅した講義が多く、マルチモダリティの重要性を再認識したのもであった。

研修を通じて感じたことは、スタンフォード大学での組織的かつ効率的な研究体制とたくさんのマンパワーが存在する環境である。一つの研究に関わる人間の多さとそれぞれが自分の専門を最大限発揮して研究に当たることができる体制などは私が所属するような地方大学ではかなり困難であり、非常にうらやましい環境であるといえる。また、建物や設備の環境もすばらしく、まさに個々人の能力が最大限発揮することができる環境が構築されていることおよびその必要性を痛感させられるものであった。

本研修では通常では経験できない様々なことを体験し学ぶことができたが、特に将来に対して明確なビジョンを持つ必要性を強く感じた。Dr. Glazer の最後の講演で画像診断の将来について示唆して頂いたが、将来像をきちんと明示することで日々の研究の方向性が定まり効率のよい研究が可能になるのだと思われた。また、Dr. Moseley による分子イメージングについての講義により、現在我々が行っている研究内容に間違いのないことを確信することができたとともに、今後の研究における方向性を示唆されたと考えている。私自身が今後研究活動を続けていく上で大きな刺激を頂いたとともに、これらの内容を学生教育や学会活動にもフィードバックしていきたいと考えている。

なお、今回の研修では GEYMS の方々の非常に細やかな心遣いをいただき、非常に快適なものであった。研修内容を始め生活環境、観光の内容にまで細かく対応して頂き、十分にスタンフォード大を生活を楽しむことができた。この場を借りて厚く御礼申し上げる。もちろん、この海外研修を引率して頂いた奈良県立医科大学病院の土井先生を始め、このような機会を与えて頂いた日本放射線技術学会および快く送り出して頂いた徳島大学医学部保健学科の原田教授、近藤教授および放射線科の西谷教授にも厚く御礼申し上げる。この非常に有意義な研修が引き続き来年度以降も継続され、多くの学会員に有益な刺激を与えて頂けることを強く期待する。



Dr. Moseley (写真左)、Dr. Glazer (同右)と筆者 (中央)による Lucas center での記念写真。